

# 知ってるようで知らない京都の史実 4

## 大覚寺と大沢の池

### ＊時代劇のメッカ大覚寺と大沢の池に滝があった…＊

京都は時代劇を撮影するにはなくてはならないロケ地ですが、その中であっても大覚寺と大沢の池は最も多く出てくる背景ではないでしょうか。定番ものの【鬼平犯科帳】【水戸黄門】や【剣客商売】等々必ずといっていいほどこの背景が出てきます。此処に滝があったら恐らく一番TVや映画に多く背景として使われたに違いありません。でも、此処に間違いなく《滝》があったのです。

嵯峨大覚寺にまかりて、かれこれ歌よみ侍りけるに

『滝の音は 絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ』 藤原 <sup>きんとう</sup>公任

大覚寺の裏山（北側）には大きな山はありません。大文字に併せて燈る【鳥居】の続きの低い山並みがあるだけです。しかも山裾から大覚寺まではすぐ傍（500m 弱）で小高い丘のような山が見えます。このような平地に近い場所に本当に滝があったのかと、最初に疑問を感じたのは住まいを大覚寺の近くに移した直後でした。

大覚寺の東に大沢の池が広がっています。その池の少し北側に名古曽の滝跡があります。滝の水は平安時代に既に絶えています。公任のあまりにも有名なこの歌は【小倉百人一首】にあります、長保元年（999年）9月藤原道長の紅葉狩りに同行した際に詠まれたとの事です。



このような地形の場所に自然の滝がある訳はなく、この滝は大沢の池に水を入れるための作り物の滝に違いはないと思いました。池の位置は殆ど変化していませんが、嵯峨院の建物は池の北側にあつたらしく、現状とは異なっていたようです。このため池に水を入れるためには敷地内を通さねばなりません。この池に流入させる小川に細工を施し、池のすぐ傍で噴出させれば滝にならないでしょうか。しかも直ぐ見える丘のような 50m ほどの高台があるのです。この辺りに流入のための池を作り、この水をサイフォン式に噴出させればある筈のない所に【滝】が突如出現する訳です。その上池に《観賞用だけでなく農業用》双方の役目を果たさせるためには、相当量の水量が必要です。

嵯峨天皇の離宮、嵯峨院が【大覚寺】として再出発したのは貞観 18 年（876 年）の事で、嵯峨院はそれより更に遡り弘仁 5 年（814 年）頃に建てられています。公任が詠んだ 200 年近くの昔なのです。この他にも同時代の女流歌人で才女の誉れ高い <sup>あかぞめ えもん</sup>赤染衛門 も大

覚寺を尋ねて次の歌を詠んでいます。

【あせにける いまだにかかり 滝つ瀬の はやくぞ人は見るべかりける】

今ある滝も早く見に行かないとなくなってしまうかも？…です。そして更に百年後、この赤染衛門の歌をうけて、西行法師さいぎょう ほうしが同じく大覚寺を訪れ下記の歌を詠んでいるのです。

【今だにも かかりと言ひし滝つ瀬の そのおりまでは昔なりけん】

要するに、平安時代の頃でさへ名古屋なごその滝跡のたきあとが著名だったのです。ある筈のない所に実際に滝があったからなのでしょう。公任きんとうが詠んだ頃には既に200年近くの歳月が流れているのです。地中に埋められた遂道には様々な事由で物が詰まり、とうとう水が涸れてしまったのではないのでしょうか。

## \* 嵯峨天皇はどのようなお方だったか \*

嵯峨天皇は桓武天皇の第六皇子として延暦五年（786年）長岡京でお生まれになります。平安初期の三筆として空海たちばなのはやなり・橘逸勢・嵯峨天皇はあまりにも有名で、ご自筆の般若心経が大覚寺の寺宝として現存しているそうです。当然のことながら、空海とは非常にお親しい間柄だったようで、中国から帰った空海は嵯峨天皇の勅許を得て弘仁7年（816年）高野山に真言密教の道場を、同14年には京都の東寺（教王護国寺）を開創しています。

嵯峨院の名も空海が入唐したとき、唐の皇帝 徳宗は重篤じゅうとくで拜謁もできず翌年早々に崩御されました。空海はその葬儀に参列したに違いなく、その御廟が長安の北西にある【嵯峨山】でした。この嵯峨山のふもとには小さな湖水が沢山あるのです。そして大沢の池に写った山の姿が【嵯峨山】によく似ていたので嵯峨の名が付けられたそうです。嵯峨天皇も幼い頃から非常に聡明なお方で、四書五経をはじめ中国の文物に造詣が深く《漢詩》をご自身で作られるほどで、大沢の池で催される【観月の夕】は徳宗の観月会に因んでの夕べでした。その他《唐》の優れた文化を我国に採り入れるのにとっても熱心なお方でした。

## \* 菊の栽培は大覚寺から始まった \*

名古屋の滝に疑問を持ち、色々調べているうちに思いもかけない事に出くわしました。菊は一年生の栽培植物ですが、日本固有のものだと《天皇家の紋章にもなっているから》当然と信じていました。処が菊は中国原産の植物だそうで、万葉集にはキクが詠まれていることから、奈良時代には入ってきていないのです。キクが初めて詠まれるのは桓武天皇が催された菊花の宴が最初とされ、嵯峨天皇の時代になり、本格的に栽培が行われるようになったとの事です。奈良時代のウメに代わる新しい時代の中国の花として、これを嵯峨院の庭園で栽培し大沢の池に島を作らせ「菊が島」と命名されたほど菊を愛でられました。



これが機縁となり、日本の《華道》は全て大覚寺から発生しています。毎年日本各地で

開かれる菊の展示会の大元はこの嵯峨菊であり、元禄時代以降特に改良が盛んになり現在に至っていますが、最初の栽培は大覚寺から始まったのです。いま全国各地の愛好家が丹精こめた栽培技術を競っていますが、この起源は全て嵯峨天皇にあるのです。

## \* 大沢の池はどのようにして拓かれたのか \*

嵯峨院が拓かれるまで、この辺りは秦氏の農場だったようです。言うまでもなく秦氏は渡来人で、周りの緩やかな傾斜地を農場にするにはどうしても【ため池】が必要でした。このため池は大沢の池の東側に位置する【広沢の池】も同じです。(双方の池は有栖川という小川を通じて繋がっており、10m強の高低差があります) このため池は以前の京<sup>みやこ</sup>奈良にも沢山拓かれており、多分同質の農業用ため池だったのでしょうか。当初は山裾からの小川の水の流入でまかなっていたのですが、嵯峨院が創建されるに際し事情が変わってきました。ここからは筆者の推測によるもので、なんらの裏付けもありません。また専門の研究者にもそのような説を述べている人はありません。(念のため)

誰かがある筈がない場所に滝を作ったらどうだろうかと思い、実行したのではないかと想像し色々調べてみました。するとこの庭園全体を設計した人物がいることが判りました。《百済 川成》という人です。彼は名から判る通り、百済の人です。本職は【絵描き】ですが、多彩な知識があり、庭園の設計にも優れていたとのこと。彼が地中に土管式の遂道を埋め込み滝の石組みを作り、サイフォン式に水を噴出させたと想像するのです。実はこの技術は既に存在し奈良の池に取り込まれているようです。大沢の池に水を流入させるため噴水方式の滝を作るという事です。池の大きさから見てかなりの噴水が必要だったに相違ありません。

【滝の音は 絶えて…】とあるからには、そこそこの音があったとみられません。石組みの中からちよろちよろ出る程度のもものでは、とても滝とはいえないという学者の説があります。だがこの石組みは公任<sup>きんとう</sup>が詠んだすぐ後に解体されて、他へ移されています。西行<sup>さいぎょう</sup>が詠んだ頃はもうその姿を留めてはいませんでした。名古屋の滝石組みは百済川成が設計したのですが、2mや3mのものではなく少なくとも5m以上の高さがあったのではないのでしょうか。川成が書いた【作庭記】によると、滝の落ち口の石を選ぶ事が最も重要とされており、その事から今ある石がその石だとすれば湧き水程度の滝といえるようなものではなかったというのです。



公任<sup>きんとう</sup>が詠んだ直ぐ後に解体され、今に残っている石が【落ち口の石】とどうして確認できますか？。5m以上の高さがある石組から水が噴出して音を立てるとは考えられないのでしょうか。我が国の歴史学者の多くの方々が、史実のみを重視し、想像を交えないようです。大本営発表は殆ど信用できないのに、想像が【何故駄目】なのでしょう。

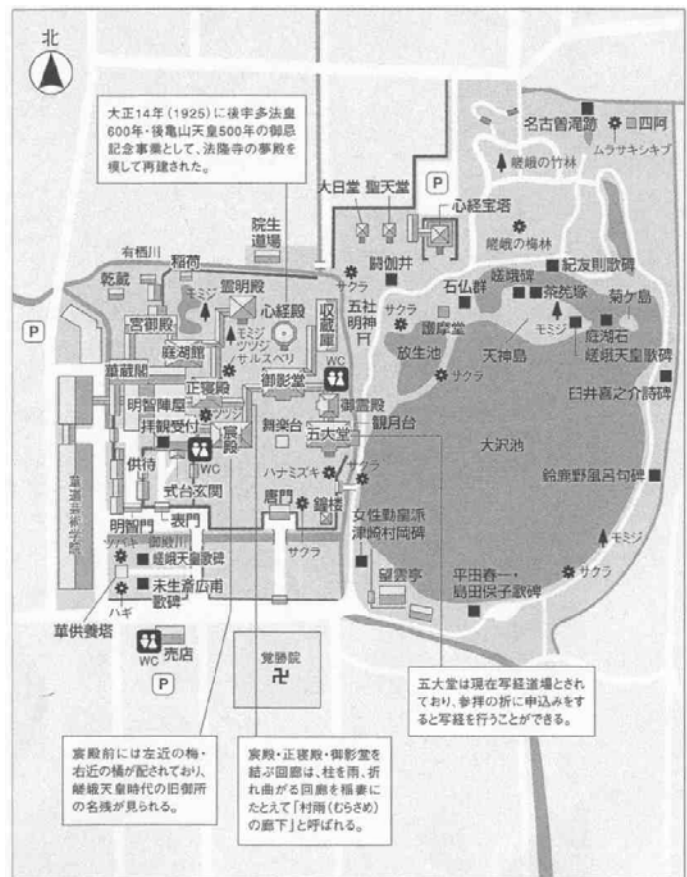
## \* 大沢の池の水源はどこから流入していたか \*

嵯峨院が建設された頃の水源がどこであったかは現時点では想像するよりありません。10世紀末には既に滝が涸れていて、大沢の池の水はかなり減っていたに違いありません。嵯峨院が大覚寺として再出発するのはご崩御の30年後で、その時点ですらかなり付近は荒れていたようです。ましてや作庭されてから200年も経過したとすればか大幅な変遷があつて当然です。

【大沢の池の景色はふりゆけど変わらず澄める秋の夜の月】藤原 俊成【新続古今和歌集】

この歌は公任から更に200年近く後に詠まれています。池の水は大幅に減じていたに相違ありません。この池の水位を回復させるのはこれから更に400年後16世紀末の【角倉了以】でした。鎌倉⇒室町⇒江戸と水位は回復できていないと推察されます。

角倉了以はこの嵯峨の出身者ですが、保津川の改作と併せてこの地域の水源の再開発を挙りました。清滝川から分水された水は山中に掘られた遂道を抜け、観空寺谷で有栖川の源流となり北嵯峨の田園地帯を通り、嵯峨天皇陵の麓から大覚寺へと流れ込んでいます。この工事は嵯峨の農業者に莫大な恩恵をもたらした事は言うまでもありませんが、意外にもあまり知られていません。大沢の池の水も大沢の池の水も昔から満々と水をたたえていたと思込んでいるだけです。



(大覚寺現在の配置図)

## \* 大覚寺と大沢の池のその後 \*

池はともかく、大覚寺はその後大きく変わります。後宇多天皇が隠棲され、大覚寺で院制を敷かれるのは元亨元年(1321年)です。このとき初めて金堂やその他の建物が現在の位置に移動されます。後宇多上皇が大覚寺中興の祖といわれるのはそれ故ですが、これらも足利尊氏とのいざこざで全て焼失したようです。またその後再建された伽藍なども《応仁の乱》で再度焼失しています。現在の建造物として安定するのは、室町後期から江戸になってからで、その間も現在も池は農業用水として働き続けています。

池の流入水にも色々な変化がありました。角倉了以の施工以降は、池の水が作庭以前より著しく増えたのは確実です。しかしこの流入水も昭和26年に改修されています。角倉了以の遂道がどの辺りだったのかの調査もなされていませんが水量は現在問題ありません。

大沢の池は近年蓮やアオコが大量に発生し、それを取り除くのに年間数百万円の費用が掛かるようになります。このため、1990年頃池に大量のソウギョを放ち水草を除去するには成功したが、今度はソウギョが水草を食べつくし、池の杭やその他の木材まで侵食し、池の水が漏れはじめたそうです。またソウギョの糞でガスが発生し臭いの害まで出始め、蓮や水草が全くなくなるという事態になりました。2000年頃から数年がかりでソウギョ駆逐がおこなわれ、現在は適当な範囲まで水草も生息するまで回復しています。大沢の池の下流にある、広沢の池は毎年12月に水を干し上げ2ヶ月間放置されていますが、これは水草の大量発生を防止するための措置でした。大沢の池も広沢の池も自然のまま放置しておいたのでは【景観が保てない】のです。

自然の風景と思い込んでいただけで、景観を保つには、昔から人の手入れがかかせないのです。スイスのアルプス風景が《人の手入れによって保たれている》のと同じと言うことを改めて思い知らされました。  
(昭和35年卒 松尾 秀明)

参考文献 史跡大覚寺御所発掘調査報告書(1997) 嵯峨大覚寺 人と歴史 (村岡 空 1988)  
大覚寺大沢池景観修復プロジェクト(真板 昭夫 2009) 大覚寺(京都の社寺No.30 淡交社) 他

## 大覚寺(嵯峨院) 建設後の経年主な表示

弘仁5年(814年) 嵯峨院建立 隠居所建物は全て大沢の池の《北側》に建設される

↓

貞観18年(876年) 大覚寺として再出発 **60年余経過**

↓

長保元年(999年) 藤原公任・道長と大覚寺を訪れる **180年余経過**

藤原公任の歌 【滝の音は 絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなを聞こえけれ】

↓ 赤染衛門の歌 【あせにける いまだにかかりし滝つ瀬の はやくぞ人は見るべかりける】

(1170年頃) 西行法師大覚寺を訪ね歌を詠む **250年余経過**

↓ 西行法師の歌 【流れ見し 岸の木立も褪せ果てて 松のみこそは昔なるらめ】

この頃には滝の石組みに使われた石の殆どが(閑院の庭に)持ち去られていたらしい

元亨元年(1321年) 後宇多法皇大覚寺を再建 **500年余経過**

この時から僧房：本堂が池の西側に全て移転される

(1600年頃) 角倉了以 保津川：嵯峨付近の河川を改修 **780年余経過**

(1680年頃) 松尾芭蕉の句【名月や 池をめぐりて 夜もすがら】 嵯峨野落柿舎滞在のときの句

昭和26年(1951年) 昭和の改修

1984年 昭和の発掘調査

(色染・昭35 松尾秀明)